

『歎異抄』

2020年05月25日

私の宗教との出会いは金子大栄の『歎異抄』であった。「青春の嵐」に襲われ悶々としていた時、こんな自由で開かれた世界があるのかと感銘を受けた。『歎異抄』は、弟子の唯円が、親鸞の説かれた教えが「異なることを歎き」、正しく伝えるために書いた書物である。日本人に最も読まれている書物ではないか。小冊子であるが、親鸞の心を伝えた書物として、多くの僧侶、思想家、文学者たちが私訳、解説書を著している。私も何冊か読んだ。最近、高森顕徹氏の『歎異抄をひらく』が広く読まれているようで、久しぶりに読み返した。三点に関し、感想と意見を書きたい。

親鸞研究の第一人者の東大教授が、高校の教科書に、「親鸞は、心から阿弥陀仏の救いを信じて念仏をとなえれば、ただ一度の念仏で極楽往生が約束されると説いた」と記述したことが発端となって、大きな議論に発展した。念仏をとなえる「善行」によって、救いに与ると解釈されるからである。『歎異抄』は「『念仏申さん』と思いたつ心のおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり」と書かれている。教授は「『念仏申さん』と思いたつ心のおこるとき」の言葉を認め、「念仏を唱えようかと思いつ心のおこるとき」と言い換えた。作家の五木寛之氏は「念仏せずにはいられない心持になってくる。そして「ナムアミダブツ」と口にするその瞬間、わたしたちはすでにまちががなく救われている自分に気づくのだ」と私訳している。弥陀の本願は、徹底的に他力なのである。

『歎異抄』の中で「善人なおもって往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」という言葉が最も知られているのではないか。悪人の方が浄土に行けるのなら、親鸞の教えは悪人になろうとする教えと受け取られた。パウロは「罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ち溢れました（ローマ5：20節b）」と言ったため、罪を増幅することをよしとする輩が現れた。親鸞の言う「善人」とは善を励み、念仏を唱えて救われようとする「自力作善」の人で、「悪人」とは人間の代名詞で、助かる縁なき煩惱の塊、「いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と自己認識する親鸞自身である。地獄にしか行きようがない自分のような「悪人」を弥陀は救ってくださるという喜びの言葉なのである。

『歎異抄』は聖書、殊にパウロの信仰と類似する点が多いと、昔から言われている。ヨーロッパの異端論争で敗れたアリウス派の人々がインドを経て中国に渡り、「景教」となった。その景教と仏教が接触したという説がある。仏教に造詣深い五木寛之氏と釜ヶ崎で司牧している本田哲郎氏が『聖書と歎異抄』と題して対談集を出している。親鸞は景教を通して聖書を読んでいたかとの対話で、五木氏は「仏教界では、触れないという暗黙の決まりなのではないですかね」と言い、更に「景教のような、シルクロードを通じて伝わって来たキリスト教的思想がその中に入り込んでいるものを、法然や親鸞が景教の經典で読んだかもしれないということは考えられないことではありません」と述べている。親鸞の信仰はパウロの信仰とあまりに似ているからである。両者の接触の歴史的確証はない。二人の人間理解と救いの確証はどこまでも深い。パウロの名を借りたIテモテ書1章15節bに「私は罪人の頭です」と書かれている。親鸞は「地獄は一定すみかぞかし」と言っている。これほど自分に絶望したならば、自分の力で立つなどとは夢にだに思わない。心を低くして、あちら側から来る救済を求めることは自然で、当然のことである。人間理解の極致、ここからの救いを模索したパウロと親鸞に感嘆する。善悪の行いに関わりなく、キリストの十字架による罪の赦し、「生の是認」が私の救い、福音である。